年　　組　　氏名

大分合同新聞 2025年7月29日(火) 朝刊21面

核廃絶へ体験語る

証言、思い 伝承者に継ぐ

戦後80年
ヒロシマから

被爆体験を話す滝口秀隆さん。やけどした左手首はケロイドでうまく動かせなくなり、腹の皮膚を移植したという＝28日、広島市

被爆者の岸田弘子さん（左）から証言を受け継いだ「被爆体験伝承者」の細光規江さん

4歳の時、広島原爆で家族とともに被爆した滝口秀隆さん(84)。28日、全国各地から広島市に集まった記者15人を前に、80年前の体験を語った。「この平和な世の中は、多くの犠牲を経て成り立っている。自分たちのような思いはもう味わわせたくない」。力強い口調で話した。

爆心地から1・8キロ

1945年8月6日。滝口さんは爆心地から1・8キロ離れた自宅で被爆した。外にいたところ米軍のB29爆撃機が飛んでいるのに気付き、家に戻って玄関の引き戸を閉めようとした瞬間、痛みと熱を感じた。爆風で吹き飛ばされ、破壊された家の中で意識を失った。

一緒にいた母は大やけどを負った。妹は頭、自身は左手などをやけどした。母の実家がある広島県福山市に移り、治療を受けた。

妹は生後10カ月だった。母が母乳を与えられなくなったため栄養失調で亡くなった。母は「自分がやけどをしなかったらあげられたのに。かわいそうなことをした」と悔やんでいたという。

滝口さんが被爆体験を語り始めたのは70歳を過ぎてからだった。妹の話をする時が一番つらいと明かす。「どうしてこんな小さい子が命を落とさなければならないのか。写真が一枚もなく、面影を追おうにも追えない」。声を詰まらせた。

日本が核兵器禁止条約に批准していないことや、締結国会議に出席しないことに悲しみをにじませる。ただ核廃絶への希望は捨てていない。

「元気に話し続けられるうちは続けたい。『核兵器は持っていたってしょうがない』という世論になるように、自分の話が核兵器はいらないと思ってもらえるきっかけになれば」と願う。

映像では表せない

広島市によると今月1日時点で、広島平和文化センターが委嘱している被爆体験の証言者は31人。平均年齢は87・7歳に達している。これから先も原爆の実相を伝えられるよう、市は2012年から、証言者から体験談を受け継ぐ「被爆体験伝承者」の養成に取り組む。被爆した家族から継承した人を含めて延べ290人が活動している。

伝承者の細光規江（ほそみつのりえ）さん(61)＝広島市＝は、被爆した岸田弘子さん(85)＝同＝の証言と思いを引き継いだ。「生の声で聞いた話を、生の声で伝えることが大切だと思っている。映像や文章では表せない部分を伝えたい」と力を込めた。

ただ、伝承者も平均年齢が60歳を超えている。市平和推進課は「若い世代に関心を持ってもらい、長く活躍してもらいたい」と考えている。（佐藤光里）

× × ×

広島市が主催する国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」が28日、始まった。参加した本紙記者(27)がリポートする。

＝随時掲載＝

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。

大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

〔問①〕広島原爆で家族と被爆した滝口秀隆さん（84）は4歳の時、どこで被爆しましたか？

〔問②〕滝口さんが被爆体験を語るのは、どんな願いがあるからですか？

〔問③〕これから先も原爆の実相を伝えていくため、広島市が養成している被爆者の体験談を受け継ぐ人のことを何といいますか？

〔問④〕原爆の被爆体験を伝える記事を読んで、二度とこのような悲劇が起きないようにするために、私たちに何ができるのか。あなたの考えを具体的に書いてみましょう。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。